



11月に入ると、温暖化とは言え、流石に気温が下がってきました。このところの雨で日が射さない日にはストーブを出すようにもなりました。しかし、昨年も、そして今年も、確かに夏の始まりが早く、秋の訪れが遅れているように思います。いつの日か年が明けてもストーブを出さないような日がくるのでしょうか。ちょっと怖い気がします。

先月10月の中旬に、ある業界団体の主催で、台湾の電炉メーカー等の視察で台湾を旅する機会を得ました。台湾南部の高雄から台中そして台北へと、電炉メーカー・高炉メーカー、スクラップの荷揚げバース等を視察しつつ4日間かけて移動しました。今回は視察そのものではなく、その旅先で、見たこと、聞いたこと、感じたことを紀行文風に記してみます。

台湾の空の下で その1

台湾の気候は亜熱帯に属しその中心を東西に北回歸線が横断しており、南と北では気候もだいぶ違います。地元の人に言わせると、その中で、台中の気候が最も安定していて住みやすいところだとか。以前日本が統治していた時代、日本人はこの穏やかな台中の地をこよなく愛したそうです。南北に伸びている島の東側は険しい山脈が連なっており、産業や居住地域は島の西側に集中しています。川も東の山脈から西海岸へと流れ落ちていきます。台湾の山は日本の山のように積極的な植林もなされておらず、土壌も貧弱なので保水力がなく、山間に降った雨水は1週間程度で海に流れ出してしまうとのこと。そのため台湾では水が非常に貴重とのことでした。従って、毎年夏先にやってくる台風は乱暴な来訪者でもあります。台湾の人にとって命の水を運んでくる貴重な賓客でもあるとのこと。たまに夏先にこの客人の来訪が少ないと、翌年の春までの水がなくなり大変なことになるのだそうです。とここで最近、この客人が台湾島に上陸せず、台湾の東の海域を通過し、日本列島の方に行ってしまう回数が多くなったとのこと。この現象も地球温暖化との関係が指摘されており、最近の気候変動が徐々に台

湾にも大きな影響を及ぼすようになってきました。

さて高雄から台中、台北への移動は、今年開業した「台湾新幹線」を利用しました。感想はというと、揺れも少なく、そして静かで非常に快適でした。おかげで厳しいスケジュールのなか、車中でゆっくり休むことができました。この新幹線、JR東海とJR西日本が共同開発した700系新幹線を参考として設計されたもので、まさに日本の新幹線です。たまたま、今年の9月にヨーロッパの技術により作られた「上海リニア」に乗る機会があり、その時のスピード感には圧倒されたものの、振動が激しく、長距離大量輸送の商業化にはまだ時間が必要だと感じたことが思い出されました。現在、山梨県で開発・実験を行っている日本のリニアが、実用化に向けて長い年月をかけているのは、この台湾新幹線と同じレベル・あるいはそれ以上の安全性・居住性(静けさ・揺れのなさ)・大量輸送性・経済性等の厳しい基準に挑戦しているからではないのかと、日本人の物作りに対する民族性を、ふと思いました。

台湾の空の下で その2

今回の旅での収穫のひとつは、多くの台湾の方と接する機会があり、彼らの勤勉さ・親切さ、明るさ、おおらかさを感じ取ることができたことです。

ご存知のように、台湾は、経済的には確固たる経済単位としての国家ですが、多くの国からは、政治的には独立した国家と認められていません(一部小国を除いて)。バナナ等熱帯果物等の生産量は世界でも大きなシェアを占めていますが、工業的・天然資源は、と云うと(誤解を恐れずに言えば)日本と同じように人と知識(知恵)でしかありません(否、国土の広さは九州程度であり、条件は日本よりも厳しいかもしれませんが)。従って、成長・発展の仕方は、日本と同じように人と知識(知恵)を最大限に活用した加工貿易によって富みを蓄積しつつ発展してきたと言えます。私にとっては初めての台湾でしたが、その意味で何か親近感のある国です。但し、資源?において、彼らにより強く存在するものがあります。それはご存知のように危機意識です。大陸(中国)との確執であり、飲み込まれてしまうのではかという絶えざる恐怖であり、それが彼ら国民をして、そのエネルギーを経済発展に向けさせたと解釈もできます。何ら工業的・天然資源の無い国の、今日の経済発展の最大の資源は強い危機意識から発する台湾国民の強いエネルギーかもしれません。

しかし、発展に成功した現在の彼らの立ち振る舞いからは、表面上はその気負いは感じられません。むしろ、大陸(中国)が現在成長しているのは、台湾資本に負うところが大きいとの自負であり、誇りであるようにも思われました。